

見過ごされる特別な能力

思いもよらないところに大きな可能性があるものだ。娘の『ひよこ組』に初めて入った時、私はその子供たちの持つ、神秘的な能力に全く不意を打たれたようだった。ほんの6人ほどの幼児達、それぞれが違った、途方もないチャレンジに直面している。ここは、保育園ではなく聾学校である。ある子は難聴、ある子は聾であるうえ、多くの子供たちは他の障害も兼ねている。足が思うように動かない、脳が正常に働かない、また顔の骨組みが正常でないなどと。彼らはみんな可愛い子ども達だ。

この子供達の両親は、胸に痛みを押し殺し、時には涙を流しながら生きている。間違った価値観の世の中で、子どもが成長するのを見るのは、心痛むことである。賃金や生産性で成功がはかれる世の中。このような世の中で、自分を優れたものと思う人の目には、この子供たちは重荷、あるいは、かわいそうな人と映るかもしれない。そのような世の中は、人間であるとはどういう意味なのか、核心を外している。

しかしそれぞれの親はまた、紛れもなく、自分の子供たちの中にある力に出くわす。その力は決して無視されることができない。彼らをだめにしてしまうことも、生きかえらせることもできる力である。「障害」は人を、家族を、極限に導くこともある。悲しみ、怒り、ストレス、葛藤が、最も安定した家族を襲い、打ちのめしてしまうこともあるのだ。

障害をもつ人々は力がある。確かに素晴らしい例がある。大江光は知的障害で、視力は損なわれ、身体的にも不自由であるが、彼は音楽的天才である。彼の CD

はベストセラーで、日本ゴールドディスク大賞など著明な音楽大賞を授与された。弱さにも関わらず、彼は父を鼓舞した。障害児である息子を育てる葛藤の中で、大江健三郎はノーベル賞を受賞した。又、乙武洋匡は足も手もないが輝いている。彼が書いた『五体不満足』は90年代のベストセラーで、過去半世紀において、売れ行き第二の本である。盲目のピアニスト梯剛之はどうだろう。最近ニューヨークのカーネギーホールで3000人の聴衆を前に力強い演奏をした。彼の演奏、ベートーベンのピアノソナタ23番『熱情』に聴衆は総立ちで、熱狂的な拍手を送った。興味深いことに、盲人が聾者の作品を演奏したのである。親馬鹿な父親として、5歳の娘のことに言及させてもらおう。娘のあやめは、聾で生まれたが4つの言語に挑戦している。最近山形新聞の一面でも取り上げられた。これらの例は、彼らの障害ゆえに私達を奮い立たせる。その力は、決して彼らが自ら求めたものでなく、大きな犠牲を伴ったものであろう。このような例は私達を鼓舞するが、力なく横たわる多くの人々も確かにいる。私は、全ての命に意味があり、力があることを知った。友人の昇太郎君は、青年であったが、精神年齢は6歳か7歳くらいで、目が見えず、喋ることも、食べることも立つこともできず、最後に出来たことは聞くことと、存在することだけだった。彼が黙って苦しむ姿は、今まで聞いたどの説教よりも力強かった。私はあるファミリーに会って非常に心動かされた。彼らの息子は、現在20歳になるが、精神的には数ヶ月の赤ちゃんで、まだオムツをしている。どうやって生活しているのか私には想像もつかない。障害を抱えた多くの家族は崩壊している。虐待に苦しんだり、離婚に終わったりする家族も多い。感情的、社会的、身体的、経済的ストレスはとてつもなく大きい。これらの家族はこの世を華々しく変えることは決してないが、彼ら自身の世界を変えるかも知れない。そして、おそらく多くの人々が目で見ることができないもっと大きな世界を変えるかもしれない。

この社会が価値をおいているものは何だろう。全てのことにお金がものをいい、我々はお金に没頭して、それが畏となって社会で失脚していく。しかし、精神障害の人々は、あまりお金のことは考えない。彼らにとって大切なのは人である。誰かがこういったのを聞いたことがある。「若い時、心動かされたのは、知的な人。年をとって、心動かされるのは、親切な人。」と。私は若い時、心動かされたのは、金を持つものであった。しかし今心動かされるのは、苦しむものである。障害者はこの国に均衡をもたらすため、我々が必要としている人々なのかもしれない。彼らは社会にとってギフトである。我々にそれぞれの人の本質的な価値、命の尊さ、卓越した愛を教えてくれる。彼らがただ存在するだけで、希望や勇気を周りに与える。この暗い世にあって重要な人々なのである。彼らの存在そのものが、虚栄心に満ちた群衆を打ち砕き、多くの人々の冷淡な心を溶かし、乾いた地に感謝の泉を湧き上がらせる。彼らは天使でもなく、憐れまれる被造物でもない。彼らは人間である。そして、おそらく、人間であることの意味を我々よりもよく理解している人々かもしれない。彼らは、間違っただライフスタイルで霊的に障害を持っている我々を癒すことができるのかもしれない。社会がどのように最も弱い人々を扱うかが、その社会の健全さを現わすということをしつかりと心に留めたい。今まで、障害者は無視されたり、放っておかれたりしているので、彼らにとってより良い環境を築くことが驚くべき結果を招くことになるだろう。

聖書の中で、預言者エリヤが神に会いに行く場面がある。最初に大風があった。次に地震が起こった。最後に燃えさかる火があった。岩も裂けるほどの激しい力であった。しかし、神はこれらの中におられなかった。そして、静けさが全てを包み、エリヤは小さな声を聞いた。一囁く声を。それが神の声であった。今日、様々なざわめき、騒音がある中で、最も小さい声も最も力強いものかもしれない。苦しむ子供の泣きじゃくる声が、神の声ではないだろうか。